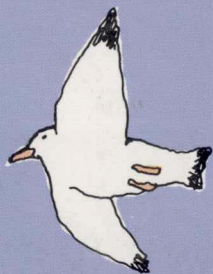


灰谷健次郎

海の国



新潮文庫

日本音楽著作権協会 第9162062-101号
(出) 許諾番号

(P556-
端田寛)

うみ 海 の ず 図

新潮文庫

は - 8 - 13



平成三年十一月二十五日 発行

著 者 灰谷健次郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)三三六六―五一
編集部(〇三)三三六六―五四四〇
振替 東京四一八〇八番
価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社 製本・錦明印刷株式会社

© Kenjiro Haitani 1988 Printed in Japan

ISBN4-10-133113-8 C0193

新 潮 文 庫

海 の 図

灰谷健次郎 著



新 潮 社 版

4764

海

の

図

向こうからおかつぱの女の子が歩いてくる。

背におぶっている人形をあやしているつもりなのか、ときどき、立ち止まっては上半身をゆするようにする。

おしゃまな感じがして、それを見ていた壮吉の顔が緩んだ。

壮吉の視線に気づいた彼女は、こころもち首を右に折って、彼を見上げた。

どこの子かなと壮吉は思った。

思っただけで口にしなかった。

すれ違って、相当歩いてから振り向くと、女の子はまだ、じっとこちらを見ている。

空中、かもめが乱舞していて、彼女はそこにいるかのように見えた。

どこの子かなと壮吉はまた思った。

歩きはじめたが、壮吉の頭の中に、その少女がちよこんと腰を下してしまっている。

漁師の子が、ひとり波打ち際を歩いたりはしない。

壮吉は気を変えて、砂浜に腰を落とした。沖合に一つ二つと石を投げた。

少女はやっぱりこちらを見ている。

三つ石を投げて、それから壮吉はおいでおいでをするように手を振った。

彼女はゆっくり近づいてきた。動作がぎこちなく、それはわざとそうしているというふうな感じだった。

壮吉は自分の隣を指さした。

はにかんだ表情をして彼女は横に座った。

壮吉はまた石を投じた。海に向かって黙って石を投げつづけた。

少女は壮吉の方を見ず、面を真つすぐ海に向けていた。長い時間だった。

「さむくない？」

壮吉ははじめて口をきいた。彼女は首を振った。

「散歩してた？」

壮吉は石を投げながらたずねた。

「……あやちゃんと」

「うん？」

お人形の名前なの、と彼女はいった。

ふーんといって壮吉は立ち上がった。そしてゆっくり歩きはじめた。彼女も同じようにした。

「どこへ行くの」

「……」

「どこへ行くの」

彼女は二度たずねた。

（どこへ行くのか、か。どこへ行くんだろ）

壮吉は胸のうちでつぶやいていた。

「どこへ行くの」

彼女はちよつと泣きそうな声になってたずねた。

壮吉はあわてた。

「ごめんごめん。散歩のつづき。あそこへ行こか」

防波堤の先の燈台とうだいを壮吉は指さした。

彼女はこっくり首を折る。

「あそこで見ていると、もうすぐ夕日が落ちてくる。人形のあやちゃんに見せてやれや。で

つかいお日ひさんやぞ」

彼女はうれしそうな表情でうなずいた。

「でつかいって、大きいということ？」

少女は真つすぐ壮吉を見てたずねた。目が深く澄すんでいる。触ふれるとこわいような白桃はくとうに似たまぶたをしている。

「大きいお日さま？」

「うん」

壮吉はちよつと眩^{まぶ}しい目つきになって、少女を見た。

「わたしはお日さまの子って書くの」

壮吉がげげんな表情をしていると、彼女はしゃがんで、小石で砂浜に、陽の字を書いた。
ああ、と壮吉は納得した。

「陽子ちゃん？」

「うん」

陽子と名乗った少女は、はじめて安心したような顔になった。

「むずかしい字をじょうずに書くなあ」

感心して、半ば独り言をいうように壮吉はいった。

「お姉ちゃんに教えてもらったの」

「ふーん」

返事をしながら壮吉は、この子は地元の子じゃないなと思っていた。

「お兄ちゃんは？」

や、と壮吉は照れた。

「壮吉……沖島壮吉」

あわてていった。

防波堤に釣^{つり}人の影^{かげ}はなかった。めずらしいことだった。

人形をおぶった少女とふたりで歩いていると、この光景とそっくりなものが、自分の記憶のどこかに刻まれてあると壮吉は思うのだった。

ふたりは先端の燈台まできた。

「あれっ」

と少女陽子はいった。

「あんなに、かもめが飛んでたのに……」

と目を丸くした。

飛翔をやめたかもめは、港の中の漁船や海苔舟のへりに止まって、静かに翼を休めていた。

「かもめさんも夕日を見るの」

「うん」

壮吉はほほえんだ。

「あやちゃんも？」

「あやちゃんにも見せてあげるといいよ」

陽子はいそいそと人形をくくってある絵柄のついた腰紐を解きはじめた。

背から人形をおろすしぐさを見てみると、この子は友だちと遊ぶより、ひとりで遊んでいるときの方が多いのではないかと壮吉は思った。

絵柄のついた腰紐というのもこのごろの子の持ち物としてはめずらしい。壮吉にはそれが

妙になまめかしく感じられた。

陽子は背からおろした人形を、後ろ向きに抱くと、燈台の石段の最下段にとんと腰を下した。不思議な子を見るように、壮吉は陽子を見た。

自制できなくなって壮吉はたずねた。

「どこからきたの」

「陽子？」

「うん」

「東京」

東京から、そうかあと壮吉はとぼけたようにいった。

「今、どこにいるの」

「エジマロウ」

「旅館の絵島楼？」

こっくり陽子はうなずいた。

「絵島楼に泊ってるの？」

「泊ってるけど、ずっといるの」

「その親戚の子？」

「そう」

絵島楼はこの地にある六軒の旅館のうち、いちばん古い旅館である。この旅館だけが観光

旅館として繁盛はんじょうしていた。

この子はいつから、そこにきたのだろう。

「ほら、しょ」

壮吉は陽子を抱き上げ、もう一つ高い段にすわり直させた。

「大きなお日さまはまだ？」

「あいにく今、雲の中に隠かくれている。ほら、あの雲の下、あーかいやろ
よいしょと壮吉は陽子の隣に腰をかけた。

「お兄ちゃん」

「なに」

「お兄ちゃんは毎日、お日さまを見にくるの」

うーんと壮吉は困った。

「あやちゃんとあしたもここへ、お日さまを見にきていい？」

「いいよ」

「あさつても、きていい？」

「うん」

「そのつぎも、きていい？」

「もちろん」

陽子は人形を自分の方に向けさせると、

「あやちゃん。あしたもお日さま見にくる？」
と問うた。

「あさつても、お日さま見にくる？」

「そのつぎも見にくる？」

「そのつぎも見にくる？」

壮吉は少し笑った。

「あやちゃん、どういうてる？」

「あやちゃんも見にくるって」

壮吉はほほえんだ。指切りげんまん、と陽子は壮吉にいった。そして小指をからませて何度も何度も振った。

突然、陽子ちゃーんという声がきこえた。

少女がひとり小走りにこちらへやってくる。

「あ、お姉ちゃん」

陽子は小さく叫んだ。

「陽子、だめじゃないの。ひとりでこんなところへきちゃ」

青いセーターのよく似合うすらりとした肢体の少女だった。

少女は壮吉を見て目礼をした。

「お兄ちゃんとお日さまを見てるの」

壮吉もぎごちなく、会釈する。

「ひいちゃん」

陽子はそういつて壮吉に、自分の姉を紹介した。

「秀世です。すみません」

と少女はいった。

そっくりな目もとをしていると壮吉はまずそう思った。

「波打ち際や岩壁はあぶないっていつもママにいわれているでしょ」

その少女秀世は、陽子を軽く睨んでいった。

「おれが誘ったもんやから」

壮吉は口の中でごそごそといった。

陽子は無邪気にいった。

「あしたもお日さま見るの。お兄ちゃんと約束したの」

「この子、すぐ人見知りする子なのに……」

秀世はそう壮吉に向かっていい、そのあと、変な子と独り言のようにつぶやいた。

壮吉は少しはぐらかされたような気分だった。

独りっ子の雰囲気で見えて、自分は一人相撲をとっていたのか。そんな思いだった。

そのとき陽子が叫んだ。

「あつ。お日さま出た！」

薄墨色うすすみいろに見えていた雲はいつか茜あかねに変わっていた。そこから落ちてくる夕日は強烈な磁気きやうれつをまき散らすかのように紅蓮ぐれんの息を吐はきつづけている。

「みんな、あかくなってる。かもめさんもあかくなってる！」

陽子やうこが叫ぶ。壮吉そうきちも陽子もいつか立ち上がっていた。三人並ならんだ格好になり、そのままの姿勢で落下する夕日を見つめた。

秀世しゅうせいが何度のため息をつくのを、壮吉はかすかに感じていた。

「あやちゃん。ほら」

陽子やうこは小脇こわきにかかえていた人形を、少しゆすつてそういうのだった。

日が水平線に隠れるまでの間は長いようにも短いようにも感じられた。

「ああ、行っちゃった。お日さま行っちゃった」

陽子の声に、秀世は我に帰ったような表情を見せた。

なぜか恥はじらいながら、壮吉にありがとうと小さな、しかし、はっきりした声でいった。夕日を見せてもらったことの礼なのか、陽子といっしょにいたことの礼なのか、壮吉にはよくわからなかった。

「おれ……」

壮吉は口ごもりながら、無器用にいいかけた。

「おれ……さっき自分の名前いってなかった」

あら、と秀世はいった。

「おれ、沖島^{おきしま}壮吉」

秀世も少し改^{あらた}まった。

「わたしは矢崎^{やざき}秀世です」

そのとき秀世は何か思いついたのか

「えっ」

と小さな声をあげ、小首をかしげるようなしぐさをして見せた。

「違^{ちが}っていたらごめんなさい。沖島^{おきしま}さんは八代^{やしろ}高校の三年A組島尾先生のクラスじゃない？」

今度は壮吉^{おとろ}が驚いた。

「きみ、だれ？」

ふふふと秀世は小さく笑った。

「……」

壮吉の目にかすかに敵意のようなものが宿る。

「ねえ。お姉ちゃん。陽子にあやちゃんおんぶさせてよう」

ふたりのやりとりで、置いてきぼりをくった陽子が、むずかるような調子でいった。

「はいはい」

秀世は器用な手つきで、人形を陽子の背にくくりつけてやりながら